



miho Hatanaka,

死について考えることはあまり日常的なことではないかもしれない。看護師や介護福祉士になるために学んでいる学生であっても、死、特に自分の死について関連したワークを行うと「そんなこと、考えたこともなかった！」と新鮮な感じを持つようである。今回は性教育のなかで扱う死についての短い文章と、看護学生による“詩”を。



【第21話 いのちのうた 6 : 大人のコトバ】

死の話はタブーであろうか。樹木葬や海洋散骨など死に関係のある話が少しずつ語られるようになってきてはいるものの、まだ一般的ではないかもしれない。海外ではデス・エデュケーションとしてプログラム化して行われることもあるというが、小学校や中学校での性教育のなかで内容に採り入れるかどうかは私も多少、考える。助産師という職業柄、誕生の話を期待されるが、それだけではバランスが取れていないと授業を始めた当初から思ってきた。その両方を常に意識しておくこと。実際、子どもたちは「性」だけではなく「生」について、ひいては「死」についてもとても関心が高いのだ。

私が授業で死について話をしようとする場合、同じ子どもたちに対して複数回の授業を受け持つことができる場合や、管理職や担任の先生との関係がきちんと築けているとフォローしやすい。何回か顔を合わせている子どもたちとの間では性に関する話もすでに充分時間をかけてきているので、流れがとても自然なのだ。「人は産まれてきて、どこにゆくのか？」というシンプルな問い。自ずと私自身の死生観が反映されるが、それを豊かにしてくれるのが近しい者たちの死であり、また、子どもたちから返ってくる反応や言葉である。人が「産まれる」場に在るところからスタートした私の仕事は、思いもかけず「死」を視野に入れることまで広がってゆき、問い続けることになっている。

死とは

作った人：M 看護学校のみなさん

「あ、
死ぬって――

もう会えないんだ、泣いても頭なでてくれないし、
抱っこもしてくれないんだ、
もうお話することもできないし遊びにも行けないんだ」

「昨日までは一緒に日向ぼっこをしていたのに」。
死は一瞬で訪れるんだな――

死は
必ず来るもの

いつおとずれるのかわからないもの
生きている以上、避けられないもの
一生離れることの出来ない身近なもの

死とはもう会えなくなること
今まで当たり前が存在が急になくなってしまうこと
当たり前のことが当たり前じゃなくなること
この世界から本当にいなくなってしまったということ

でも…

体は消えて無くなってしまいが、魂は存在し続ける、
実際には会えなくなったけど、どこかで見守ってくれている。

身体が死ぬことだけが死ではなくて忘れ去られることも本当の死だと思います、
人が死んでも身近な人などの心の中では生きているから。

死というのは生きることの経験を教えてくれるのかなと思う
ただ別れではなく試練だと考える
だから死とは、残った人には勇気を与えたり、力になるものなのかなと思います。

死とは

その人が人生をまっとうしてきたことの象徴

これまでの集大成

ものすごく辛いもの 一一でも、

葬儀の時はみんなで思い出話をして穏やかな気持ちになるのは今でもすごく不思議です。

本当に疲れを癒すところ 一一事故や病気でまだ死にたくないと思っている人も神様がもう休んでいいよって言ってくれてるのかなと思います。

死は、花と同じで人生の変化の一部

最終的に自分自身の死を体験しないといけないもの、

1番怖くて不思議な体験を人生の最後に取り替えているものだと思う

死はひとつの区切り

一生自分の心に存在するもの。

大切な人との別れ。全てから開放される時

そして

死は

未来への第1歩



dawn